

嵯峨野は、大覚寺清涼寺のほとりを北嵯峨といひ、天龍寺法輪寺の辺を下嵯峨となづく、野々宮は其中途なり。いにしへより閑静の地にして、故人も多くこゝにかくれ、秀咏の和歌数ふるに違なし。源順も此地に遊んで紫藤の賦を作り、楼台空く僧侶の室となりぬるを歎きしは、文粹にのせけり。こゝは旧野山とも田獵の地にして、嵯峨帝始て御狩ありてより、文徳清和陽成の三帝はおこたらせ給ひしが、光孝帝かさねて興し給ひ、御幸なりぬ。あるひは此野へ官人を遣されて、松虫鈴虫などをとらせ給ふに、其とき野に虫屋を造り、音よき虫を撰て奉りける。嵯峨帝は無双の御能書にして、日本三筆の第一なり、又詩文にも達し給ふ事は、文華秀麗に見えたり。御位を淳和帝に譲らせ給ひて、これなる離宮にかくれ、嵐嶺の白桜、亀緒の落月に、叡慮を慰めたまふ。かの世捨人は、此野の女郎花のうつくしきを手折とて、馬より落てよめる。

古今序 名にめで、おれるばかりぞ女郎花我落にきと人に語るな 僧正遍照

玉葉 かり人の草分衣ほしもあへず秋のさが野の四方の白露 順徳院

長久二年八月松尾社行幸侍けるを、春宮の女房車に草の花をかざして嵯峨野のさゝうへに立ならべて物見侍けるを、近衛のつかさにてつかふまつりて侍けるが、薄の車のもとにうちよせてよみ侍ける

続 古 うちまねくけしきことなる花薄行過がたく見ゆる野辺哉 中納言資綱

新 千 絶せじな後のさがの、末とほくとみの緒河の流あまたに 亀 山 院

新 千 うかりける此世の秋のさがの暮露も時雨も身にやそふらん 法 印 定 為

嗟 峨 十 景

叡 嶽 晴 雪 難 瀬 飛 瀑 遍 照 孤 松 愛 宕 雲 樹 五 台 晨 鐘

幡 山 靈 社 嵐 嶺 白 桜 仙 翁 麦 浪 亀 緒 落 月 雄 蔵 紅 楓